令和６年度入学試験問題（後期日程）

小　論　文

中等教育教員養成課程

注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること。
2. 解答紙には、かならず受験番号を記入すること。

〔問〕　つぎの文章を読み、あとの問いに答えなさい。

3　相手の位置に立つ

一・五人称の看護

相手からのサインをキャッチする。声かけによって〈出会いの場〉を開く。ケアの要点として、その次に来るのが「相手の位置に立つ」ということである。人は相手の経験をそれとなく感じ取り、相手の位置に立とうとする性向を持っている。まちがえることもあるし、私自身もそうだが相手の立場に立つのが苦手な人というのもいる。しかし、「もしも相手の位置に立ったら」と仮定して推論するという感覚は、人間生来のものとして認めてよいだろう。「相手の位置に立ってものを考えよう」というのは、あまりにも素朴な要請である。

ところが、他者の思いは多くの場合、謎として登場する。ケアの現場では、患者や当事者が心の底でどう感じているかは解答不可能な難問であり、だからといってこれをないがしろにしてしまうと、とたんに実践が非倫理的なものになる。「相手の位置に立つことが必要であり、かつ不可能でもある」というジレンマが、対人関係の根底にある。

先ほど葬儀の場面での子どもへの声かけについて語った宇都宮さんは、患者の立場に立つ努力を「一・五人称の看護」と表現する。二人称ではまだ〈私〉と〈あなた〉の距離がある。相手の立場に十分立っているとはいえない。そのため、①〈私〉と〈あなた〉の中間の一・五人称にまで踏み込む努力をするというのである。

②興味深いのは、相手の立場に立つということが、共感や想像力ではなく、声かけという具体的な身振りとして立ち現れるということだ。相手を想像することは難しく、常に思い込みをはらむ。でも、相手を理解することが難しいならば、相手自身に尋ねればいい。つまり、一歩踏み込んで相手の位置に立つということが、相手の声を聴くことに直結する。声かけはその出発点となる。

相手の声に耳を傾ける

大阪市西成（にしなり）区で「こどもの里」という施設を運営し、地域の要保護児童対策地域協議会の司会も長くつとめる荘保共子（しょうほともこ）さんという人物がいる（こどもの里については第四章で詳しく触れる）。「子どもの命をど真ん中に」と呼びかけ、行政と民間のケアラ

ーたちに、子どもが何を望んでいるのか、子どもにとって最善の利益は何なのかと問い続ける荘保さんの一貫した姿勢は、「相手の位置に立つ」というケアの倫理における最良の実践例のひとつである。

児童相談所や自治体は、しばしば制度や業務の都合で、支援や措置の方針を決定しようとする。声を出す親の意見しか訊(き)かないことも多い。しかし、荘保さんはそのつど「ちょっと待って。それは子どもの視点に立ってますか？子どもの声を聴きましたか？」と問いなおす。子どもの視点に立ち、子どもの最善の利益を守るためには、実際に子どもの声を聴かなくてはならないという確信ゆえだろう。

出典：村上 靖彦著「ケアとは何か 看護・福祉で大事なこと」、中公新書 2646、中央公論新社、2021 年、pp. 25-27

（設問の都合により本文の一部を改変している。）

（問１）下線部①のことの意義について、あなた自身の考えを、75 字以上 100 字以内で述べなさい。

（問２）下線部②に関連して、あなた自身は学校教育の中で教師として、子どもたちに、どのような立ち位置で、どのように声かけを行っていきたいと考えますか。あなた自身の意見を 300 字以上、400 字以内で述べなさい。